

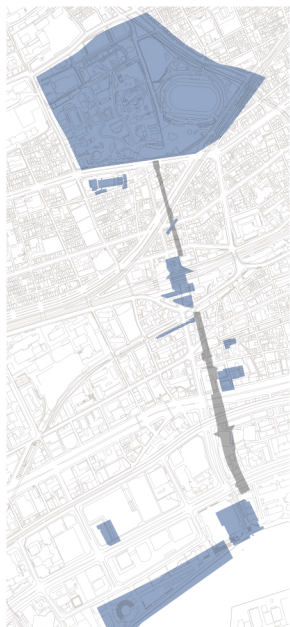
Blue Note

— 青が編む、ミュージアムロードのランドスケープ

都市の道は、目的地へ向かうための「通過空間」として設計されてきた。本計画「blue note」は、ミュージアムロードに点在する道路、公園、橋下、歩道橋といった都市の地表や余白を対象に、色・段・動線というランドスケープ的操作を施すことで、通過のための空間を、人がとどまり、表現し、関係を編み直す場へと転換する試みである。ジャズにおけるブルーノートのように、都市にわずかなズレとリズムを与えることで、日常の風景に新たな余韻を生み出す。

1. 現状分析とビジョン

1-1. 現在のミュージアムロード



ミュージアムロード本通り周辺には著名な文化施設が集積している。しかし、その文化施設はそれぞれ独立し、「ミュージアムロード」という名前がついているにもかかわらず、道自体はただの通り道として認識されている。文化施設同士を繋ぐミュージアムロードを認識、体験させるための空間操作が必要である。

■文化施設
■ミュージアムロード

1-2. 立地が持つポテンシャル



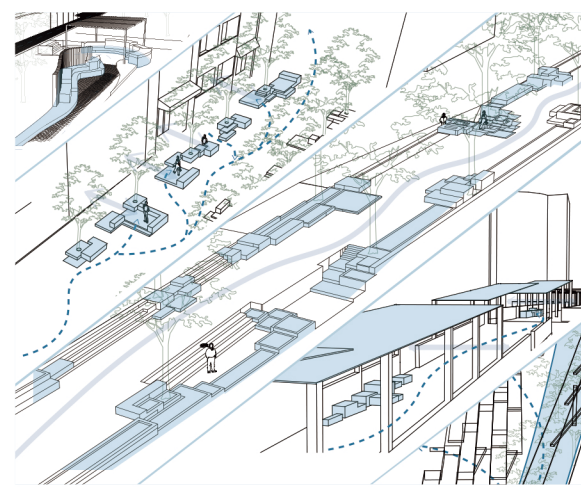
この地は山と海に挟まれた斜面地に位置する。現在のミュージアムロードにはこの豊かな立地を体験できる場所が極めて少ない。この立地ならではの良さを空間化するにあたり、自然豊かな立地を感覚的に体験できる操作を加える。

1-3. 100年続くまち作り



今後街が長期間に渡って成長し続けるためには、街作りへの住民の参加が不可欠となる。本提案では、街の住民に対し、アイデンティティとシビックプライドを確立させることで街づくりへの興味・参加を促し、100年に渡り街を守り続けていくための種を撒くことを目的とする。

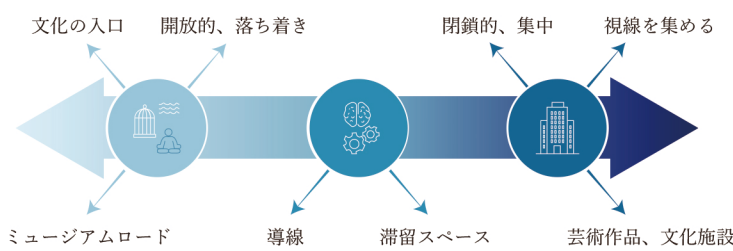
1-4. アクセントカラーとアイデンティティ



青というアクセントカラーを街に挿入することで、街の持つ課題を解決すると同時に、街のアイデンティティを確立させ、「100年続く街」に向けて種を撒く。

2. 現状分析とビジョン

2-1. 色は人の行動を誘導する

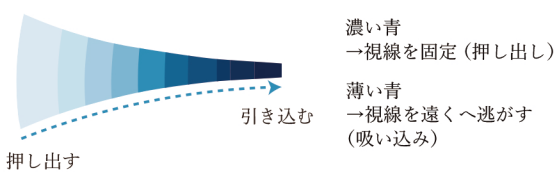


色の濃淡が人に心理的に影響し、行動まで誘導する。濃度が生み出す空間と人の行動の原理を利用し、ミュージアムロードから文化施設へ視線や導線を誘導し、文化施設がこの街のランドマーク認識させる。

2-2. 青が持つ効果

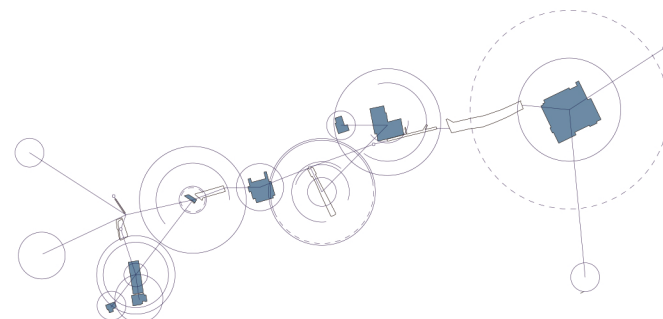


2-3. グラデーションによる活動の緩急



青の濃淡によるコントラストが、街の「立ち止まる場所」と「歩く場所」のリズムを作る。

2-4. 文化のまち—色は文化を可視化するメディア

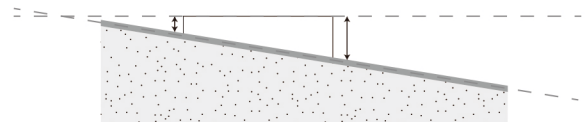
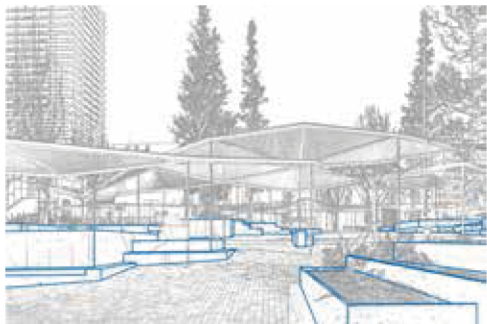


文化施設に落とした青の色が文化施設をつなぎ、ミュージアムロードを再編成する。

3. 道の価値の再定義

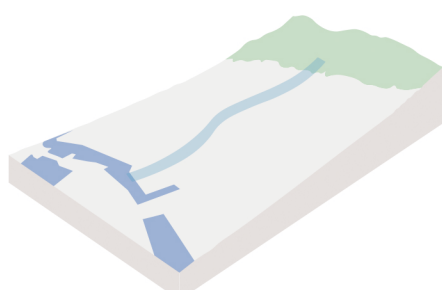
3-1. 段差のデザインコード (地形の可視化)

灘駅南広場でも扱われているこの「段差」というデザインコードを引き継ぎ、地形豊かな街を構成する。

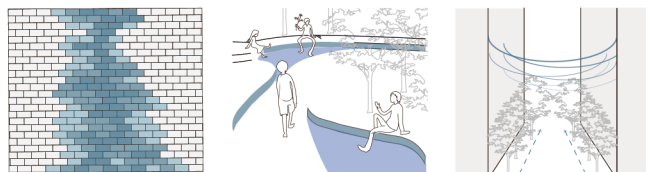


水平に作られた段差は地面と角度、高さの違いを生むことにより、ミュージアムロードが傾斜地に位置することを示す。

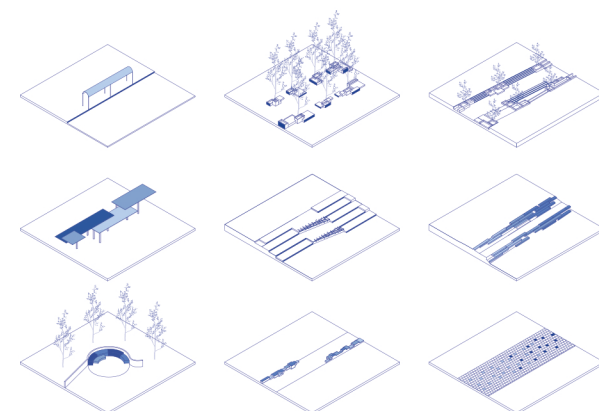
3-2. 水を使った地形表現 (立地の可視化)



水が流れるように「青」がミュージアムロードを彩ることで、山と海に挟まれた立地を視覚的に体感することを可能にし、同時に街の文化をつないでゆく。



2-4. 道としての価値

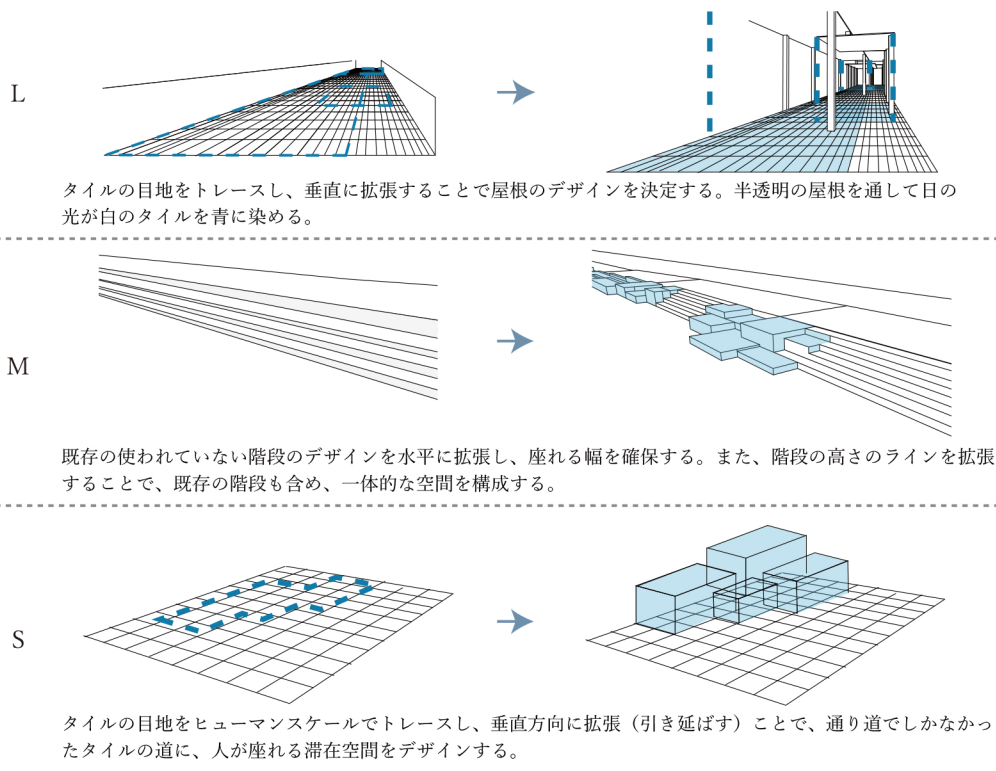


現在、ミュージアムロードは文化施設を訪れた人にとって通り道として認識されている。そこに段差や色の操作を加え、滞在空間を付加することにより、道自体の空間価値を与える。

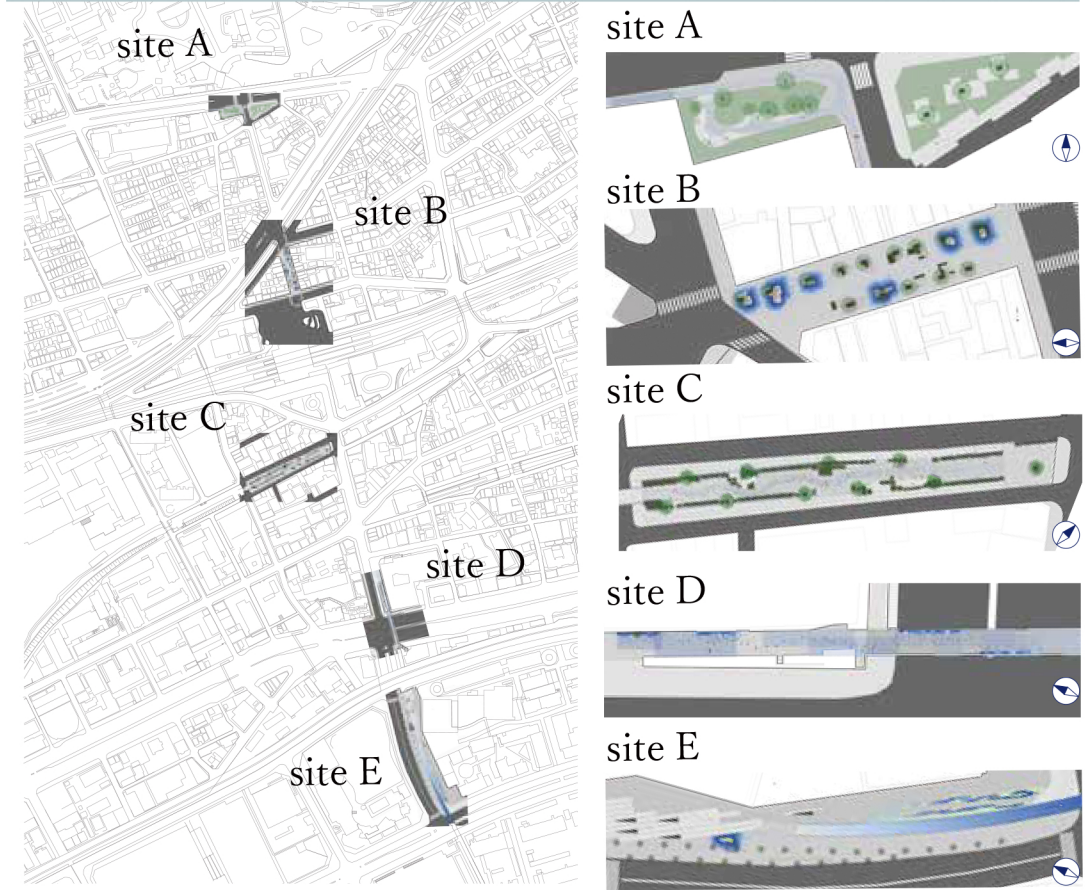
4. Design strategy

4-1. デザインコードの拡張

それぞれの地点で既存のデザインコードを拡張し、既存の空間を傷つけない一体的な滞在空間を生み出す。

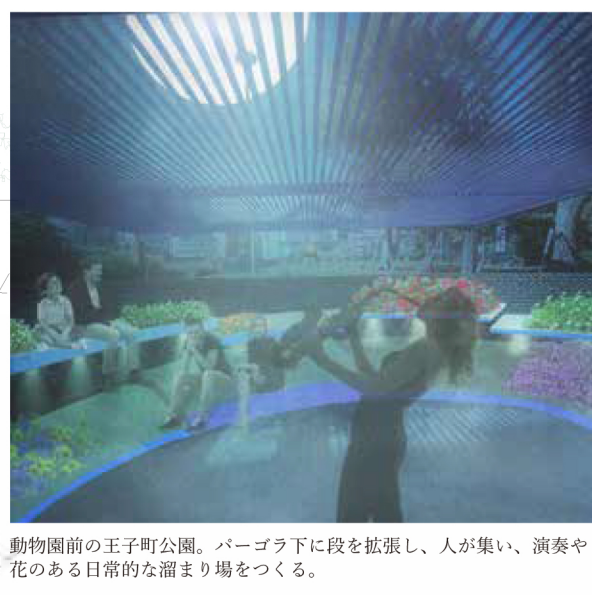
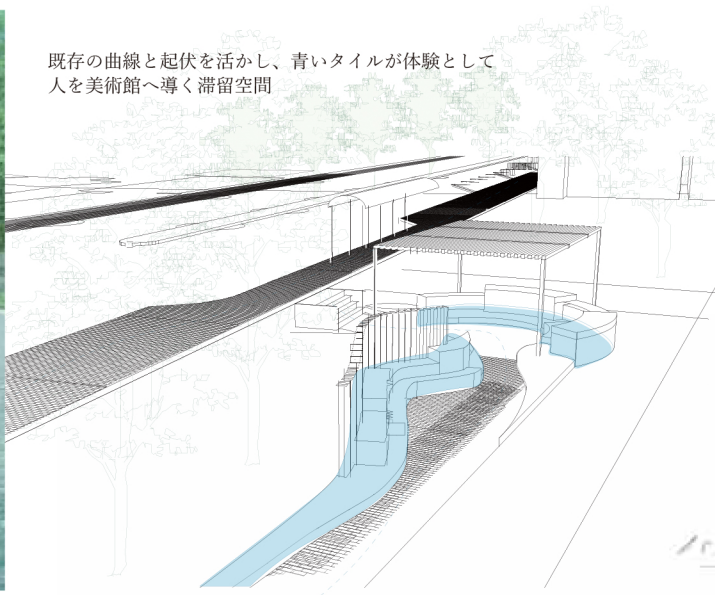


4-2.site

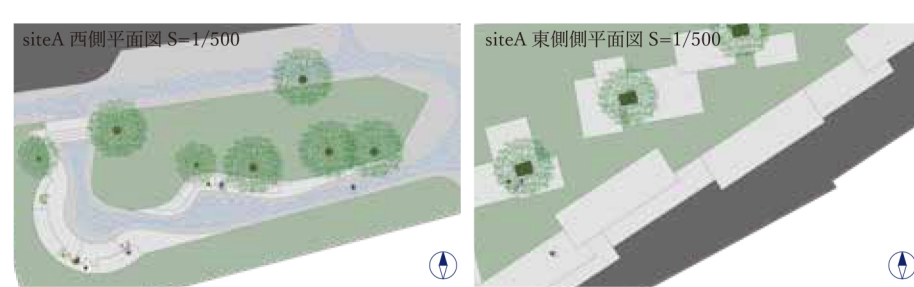


5. 設計詳細

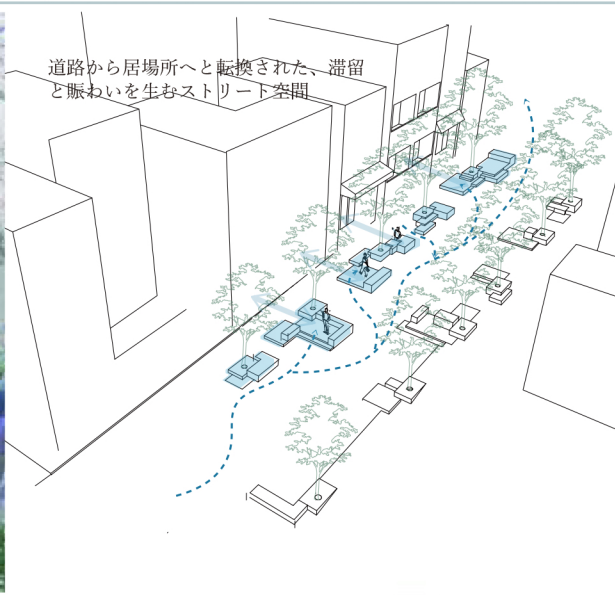
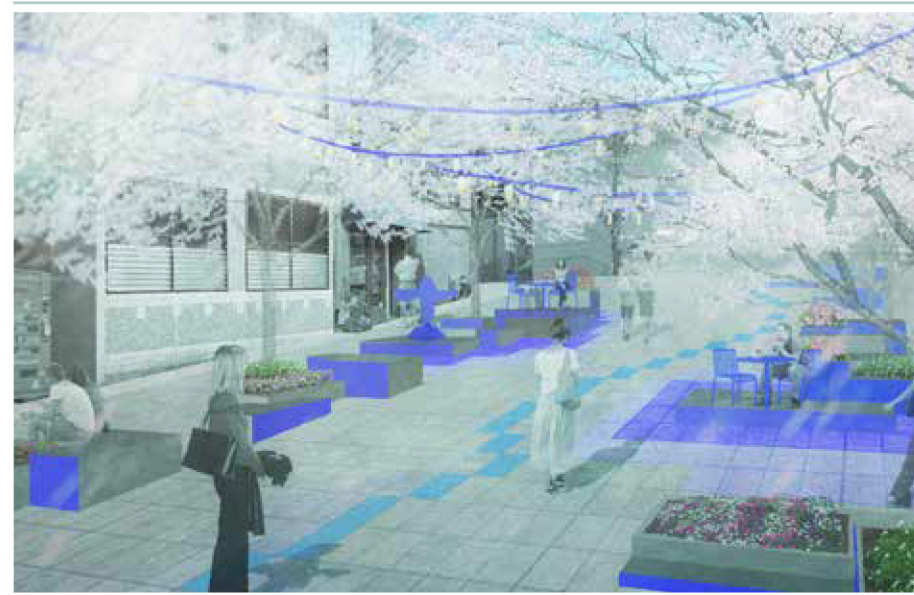
site A : 導く道



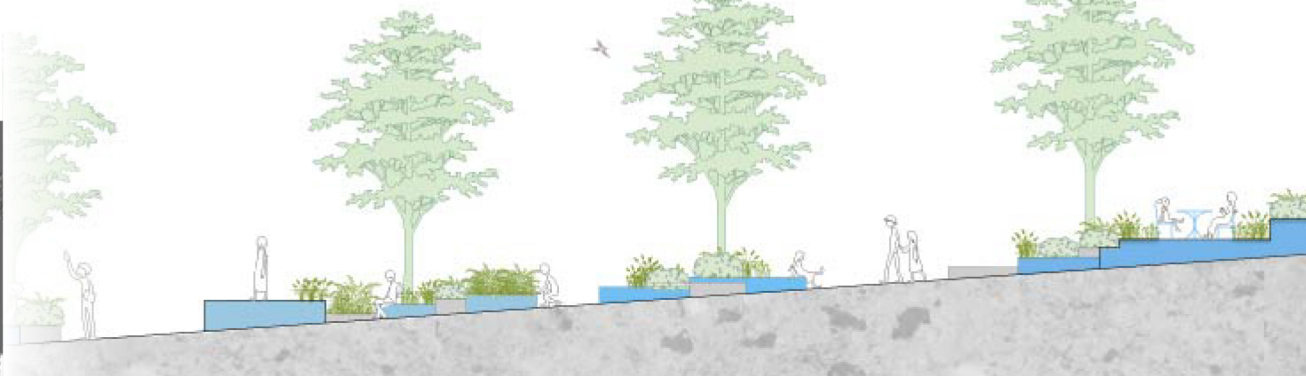
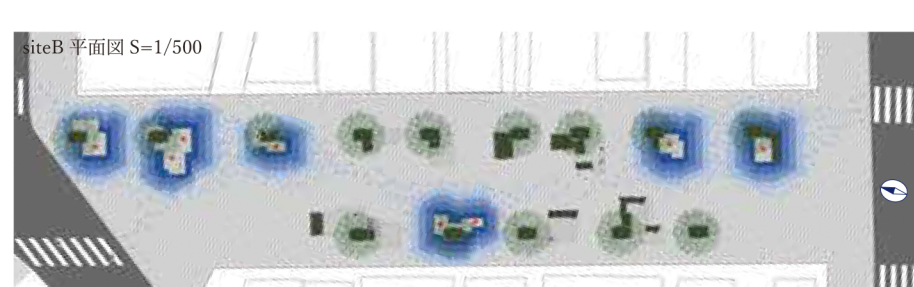
ミュージアムロードから横尾忠則現代美術館方面へと続く歩道の風景。美術館に近くにつれて、舗装に用いた青いタイルの色を徐々に濃くすることで、無意識のうちに人の流れを美術館へと導く。道そのものが、目的地へ向かう体験を演出する装置となる。



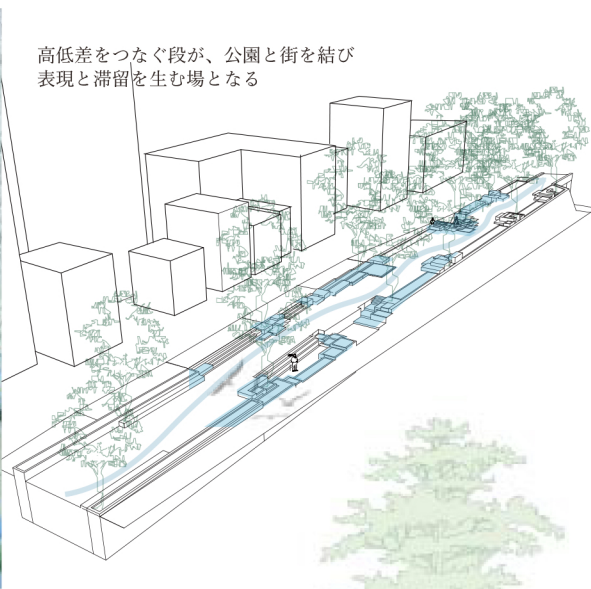
site B : 道の居場所



歩道化された元車道の様子。沿道には飲食店が立ち並び、テイクアウトした食事を屋外で楽しめる空間が広がる。歩行と滞留が共存する、にぎわいのあるストリートを表現している。



site C : 段の舞台

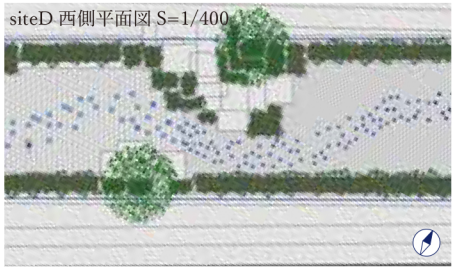


高低差をつなぐ段が、公園と街を結び表現と滞留を生む場となる

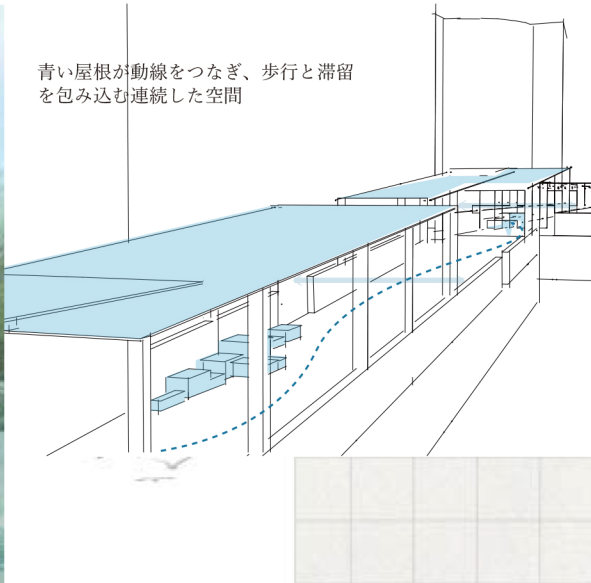
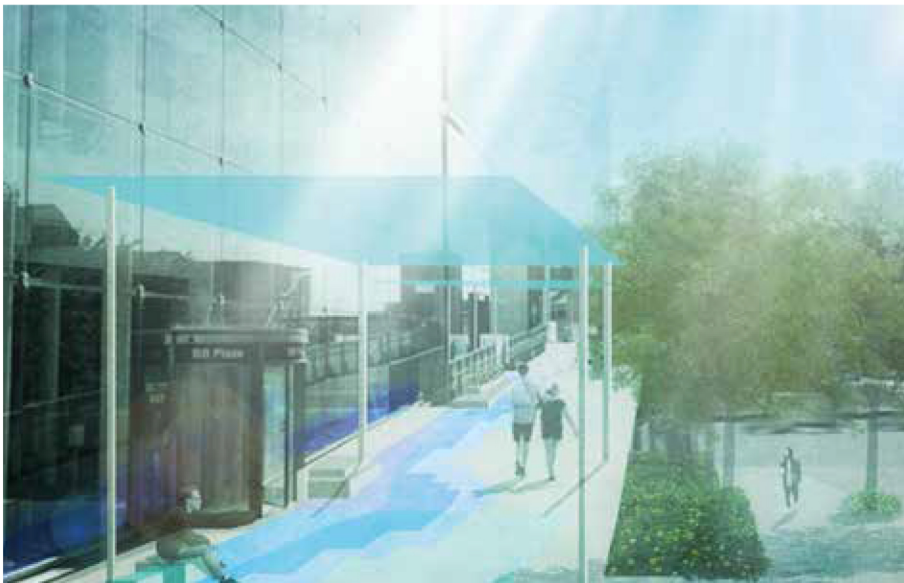


公園内部の風景。両脇の花壇に色彩を与え、段状空間に奥行きと滞留を生み出す。

臨港線跡地に位置する公園を対象とし、既存の高低差を生かしながら段状空間を拡張する。段の側面を青く着色することで視認性を高め、ミュージアムロードから人々を公園へと誘引する装置として機能させる。



site D : 光のプロムナード

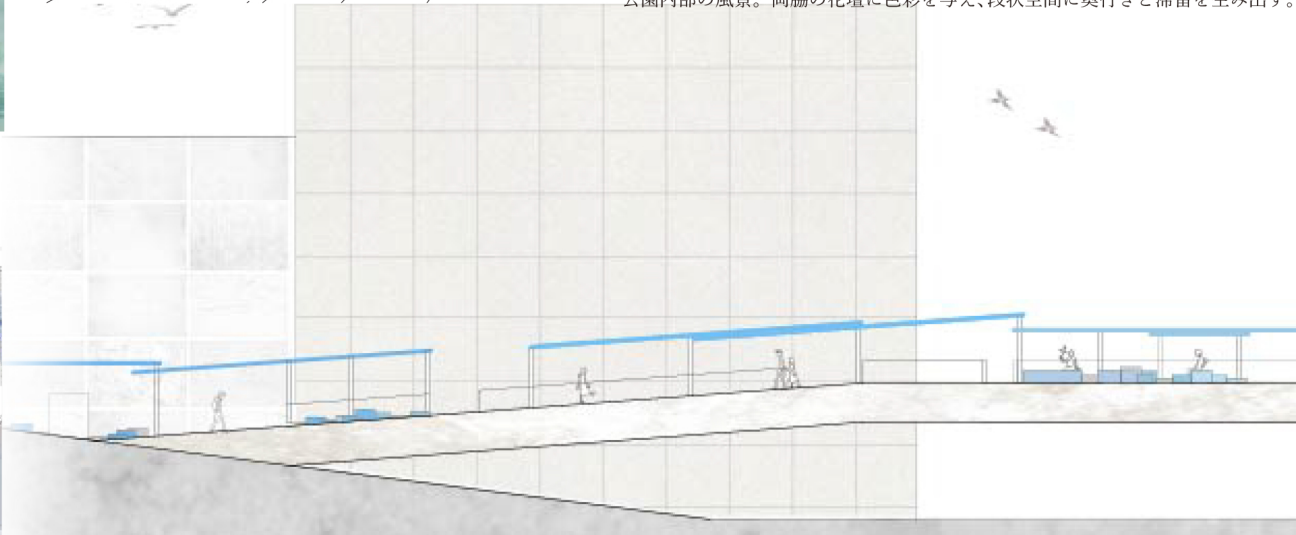
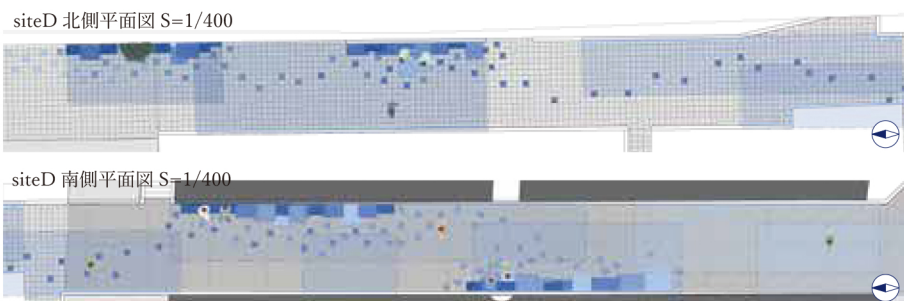


青い屋根が動線をつなぎ、歩行と滞留を包み込む連続した空間

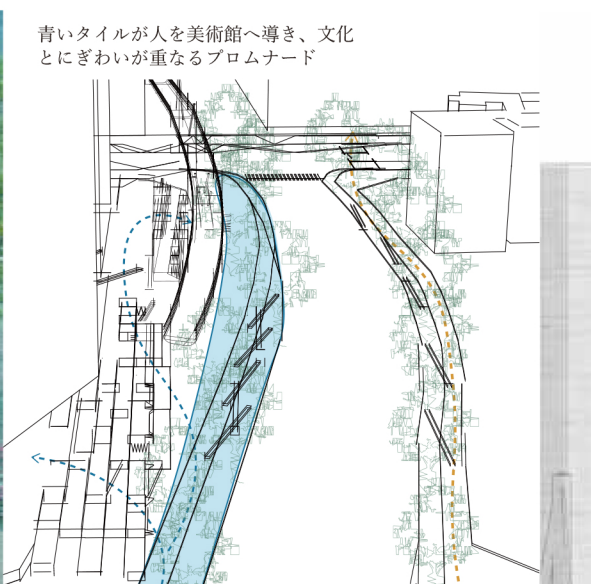


公園内部の風景。両脇の花壇に色彩を与え、段状空間に奥行きと滞留を生み出す。

BB プラザ前に広がる空間。地上のスロープから歩道橋へと連続する動線に、光を透過する青い屋根を設けている。この屋根はBB プラザから歩道橋まで途切れることなく続き、施設と都市空間を視覚的・体験的に接続する。通過のための動線が、光に包まれた象徴的なプロムナードへと変換される。



site E : 集う終点



青いタイルが人を美術館へ導き、文化とにぎわいが重なるプロムナード



歩道橋下に段状のステージと客席を設ける。歩道ではマルシェが開かれ、文化とにぎわいが交錯する。

歩道の先に、目的地である神戸県立美術館を望む風景。青いタイルは途切れることなく美術館まで続き、これまでのミュージアムロードの体験を収束させる。歩道を拡張することで、車中心だった空間を人が主役のプロムナードへと転換し、美術館へ向かう期待感を高める。

